

<川越市>

## 統一地方選挙2019 川越市議会議員選挙

**苦杯を飲んだ新井喜一氏…だが…新井氏に信を託した**

**1,216 票は、新井氏の心からなる誇りなのだ！**

**「でっち上げ」ハラスメント疑惑の逆風にもめげず**

**泰然と立候補した新井喜一氏の誠実な姿…。**

平成時代最後の選挙となった4月21日執行の統一地方選挙。特に川越市では新井喜一氏の当落に有権者とマスコミの注目が集まった。そして迎えた投開票。

結果、新井喜一氏の得票数は1,216票で選挙には敗れた。だが、今回の新井氏の得票は大きな意味を持つ。それは「言われなきハラスメント疑惑」によって議場を去った新井氏に対して、1,216名の市民が信を託したことが明らかになったからである。強いていえば、新井氏は潔く辞職したことを「反新井キャンペーン」に暴走するメディアや対抗馬に利用されたと言えるだろう。

本紙既報の「テレビ埼玉による確信犯の虚偽報道が投票直前に放送された」ことも新井氏の得票に大きく影響したであろうことは想像に難くない。このテレビ埼玉の、もはや「凶悪」としか言いようがない新井氏に対する対応については後記する。

### 1,216名から広がる市民輪

反新井氏勢力の影が背後にちらつく「ハラスメント疑惑」では、当初から川合市長が自らのブログで新井氏を推定有罪であるかの見解を表明し、新井氏を支援する立場の本紙や映画監督ら呼び捨ての名指しで公然と批判した。

一方、渦中の新井氏は泰然自若、黙して語らず、議会の混乱と家族への報道被害、風評被害の拡大を避けるため、一切の疑惑を否定しながら潔く議員を辞職した。新井氏の胸中には「正義は、必ず不義を暴いてくれる」という確固たる信念があったに違い

ない。そして1,216名の有権者市民も、新井氏の姿に「義の政治家」たる公正な人間性を感じたに違いない。「議会は市民のための議会であり、その議会を混乱させては最大の被害者は市民になってしまう」「家族も守れない政治家が社会を守れるはずもない」こうした真理を新井氏は身をもって実践したのであり、新井氏に信を託した1,216名の市民には、彼の「義」というものが伝わっていたのだ。

そしてこれから、新井氏の女性A氏に対する名誉毀損裁判によって「ハラスメント疑惑」の真相が解き明かされていくにつれて、先入観やメディアの虚報にとらわれていた市民たちの多くが、新井氏への信頼を取り戻すだろう。

## 論功行賞か?! 謝罪議員らは軒並高得票での当選

いわゆる「新井落とし」を昨年4月の段階から画策していたとみて間違いない「反新井派」陣営は、開票結果に快哉を上げ祝杯に狂喜したことだろう。

だが、その「反新井派」の祝杯が今度は苦杯へと転じることになることを本紙は予言しておこう。まず、得票数の内実からすれば、保守自民党市議で「ハラスメント疑惑」を訴えた女性A氏に求められてもいない謝罪会見を行った、海沼市議は得票3位の快勝を獲得し、無所属ながら同じく謝罪会見に並んだ樋口市議も2,999票を得て11位での当選。そして、女性A氏の記者会見を素通りさせ、市の委嘱事業者だけで構成した第三者委員会を設置し、その調査結果報告書を非公開のまま衆目から遠ざけた小野澤市議も3,006票で10位当選。さらに「新井派」を裏切るかたちで現政権におもねった小高市議も当選。

ここで冷静に考えてみて欲しい。「疑惑の告発記者会見」で女性A氏が公開した隠し録音の音声では、新井氏以外の「謝罪市議」らによるセクハラ発言の方が明らかに声高らかで、あからさまだった。謝罪会見を行った海沼・樋口両市議は「だからこそ謝罪した」と釈明するだろうが、実際には新井氏の孤立化を狙った「反新井派」陣営の示唆、少なくとも選挙戦における保守陣営を忖度(そんたく)しての形式的な謝罪であった。「謝罪芝居」を演じながら辞職しなかった市議らが再選され、ハラスメントを完全否定しながらも、市民のための議会運営を議員バッジより優先して調査結果が出る前に潔く辞職した新井氏が敗れたことは、公正であり続けようとした新井氏の誠実さが際立ったことになる。

元からあり得ないことだが、仮に新井氏が謝罪したところで「それみろ、やっぱり」と言及の具に利用されることになり、どちらにしても新井氏は「でっち上げ」の罠から逃れることは出来なかったのである。このような経緯をみれば、新井氏の孤立化に一役買った「ハラスメント市議」らが揃いも揃って高得票率で当選している事実こそが、逆に「ハラスメント疑惑」の真相を浮き彫りにしているのである。

その意味で、新井氏に信を託した 1,216 票は、まるで「ハラスメント疑惑」の論功行賞の如くに謝罪市議らを当選させた組織票よりも、はるかに大きな価値がある。

本紙が独自に得た情報では、選挙直前、川越市医師会が新井氏支持を表明。

川合政権陣営は顔面蒼白になったという。今回の選挙で新井氏が敗れたとはいえ、言うまでもなく医師という人々は高い知見を持つ有識者でもある。その医師会が、「ハラスメント疑惑」の渦中の人物であることを百も承知で、新井氏を推した理由は何んであろうか？ それは言わずもがな、「義の政治家」新井喜一を邪魔だとする「不義の政治」が川越市に巢食っていることを鋭敏に感じ取ったからではなかろうか。

かたや「反新井派」に回った自称政治家は、芝居がかった謝罪はしても議員を辞めることはなく、保守政権の支援にすぎた。勝利の美酒に酔いしれる「反新井派」当選議員らの得票は、まだ「ハラスメント疑惑」の真相を知らされていない市民たちによるものではないのか。

## 11 日前のニュースを訂正?! もはや「報道テロ」のテレビ埼玉!

新井氏と支援者たちが闘う敵は「不義の自称政治家」たちだけではない。

テレビ埼玉も、川越市議会議員選挙の公正を妨害したという意味では市民の敵となった。テレビ埼玉がニュース番組で、確信犯の編集によって新井氏を不当に貶める虚偽報道を行ったことは[本紙既報](#)の通りだが、なんとテレビ埼玉は、選挙の投開票で新井氏の落選が確定した翌日の 4 月 22 日になって「**11 日も前のニュースについて訂正放送した**」のである。アナウンサーが読み上げた原稿は以下である。

『今月 11 日のこの時間、ハラスメントをめぐる口頭弁論のニュースの中で、元川越市議の辞職の時期を、第三者委員会のハラスメント認定の後とも受け取れかねない表現がありました。実際には、元市議の辞職は、ハラスメント認定の発表より前でした。お詫びして訂正します。』

いったい、テレビ埼玉「報道制作局報道部」というのは、どこまで虚偽に満ちているのだろうか。本紙既報を参照して頂ければ明白だが、問題の虚偽報道は「受け取れかねない表現」どころか、「新井氏はハラスメントが認定されて辞職した」と視聴者が「そう受け取るように」悪意に満ちた確信犯として時系列を編集した、日本のテレビ放送史上最悪の「報道テロ」といって過言ではない。

4 月 11 日の夕方 5 時 45 分のニュース番組「NEWS545」のトップニュースとして放送された本件虚偽報道に対して新井氏代理人・清水勉弁護士は、「**生放送の時間中に何度も強く抗議し、その後もテレビ埼玉報道制作局報道部に対して謝罪と訂正放送**

**を重ねて求めていた**」が、「報道部」は頑なに…というよりも挑戦的な態度で謝罪も訂正も拒否していた。ところが、選挙での新井氏の敗退を待っていたかのように、開票翌日に一転して訂正放送を行ったのである。清水弁護士に対して「間違っていないのだから謝罪も訂正もしない」とせせら笑っていた報道部「ヨノ氏」や「報道部長」は、なぜ選挙の直後に謝罪、訂正したのか？

即時性が生命線のニュース番組で、11日も前に生放送したニュースの訂正を行うこと自体がそもそも異常である。しかし、テレビ埼玉局内の少なくとも「報道制作局報道部」が、新井氏を落選に追い込むべく、はじめから悪意と策謀をもって虚偽報道を展開したならば、この「**11日後の訂正**」は辻褃が合う。

選挙期間中に新井氏のニュースを訂正すれば、新井氏の支持票が増える可能性さえある。テレビ埼玉「報道制作局報道部」が、時間稼ぎで清水弁護士への対応を放置しながら、「新井落とし」の目的を達した選挙直後に、一転して形式的な訂正放送をしたと想像しても飛躍ではない。

メディア関係者ならば、このテレビ埼玉の対応の異常性がよく理解できるはずだ。

新井氏がBPO（放送倫理・番組向上機構）に対して虚偽報道による人権被害を申し立てたことを知った「報道部」が、「訂正放送はした」という既成事実をでっち上げるにしても、選挙の当落確定直後というタイミングが偶然であるはずがない。しかもテレビ埼玉は、その訂正放送のなかで「**新井喜一**」の名前は一切出さずに「**元市議**」として済ませている。これでは、新井氏への謝罪にも訂正にもなっていない。

このような人権被害に相当する虚偽報道では「〇〇氏とご家族、関係者の皆さまに謝罪致します」とすることが放送局の常識でありモラルだが、テレビ埼玉には、放送の公正や倫理が存在しないようである。ちなみにテレビ埼玉の筆頭株主は「埼玉県」だ。自治体が主要株主の放送局であれば、「新井落とし」を画策する政治的な意思が介入する隙間は十分にある。当初、「新井バッシング」に走ったメディアが自社のメンツのために新井氏叩きの論調を止めなかったとはいえ、このテレビ埼玉ほど新井氏に対する露骨な敵意と策謀を展開した「**企業犯罪メディア**」は他にない。

## **肉を切らせて骨を断て！義の人・新井喜一の真価はこれから光彩を放つ！**

しかし、新井氏はこのテレビ埼玉の「**報道テロ**」に対してさえ泰然自若だ。

選挙直後、新井氏は「誰よりも苦労をさせてしまった女房への、わずかばかりのねぎらいで、温泉に連れて行きます」と夫婦で短い旅に出た。新井喜一とはこういう人物であり、卑しいハラスメントの真逆にいる「**光**」の政治家だった。一方、川合政権と市議会に寄生する「**反新井氏派閥**」、名ばかりは放送局でありながら陰謀と呼んで



相違ない「**虚偽報道に手を染めたテレビ埼玉**」は、闇の住人たちである。いや、「人」でさえないかもしれない。何んの利権にあずかるのか…何んの特権意識があるのか…は知らないが、仮にも「**報道部**」の名刺を持ちながら、ここまで凶悪な虚偽報道をし、その報道被害者（新井氏）を嘲笑うなどは正常な精神の人間ではないだろう。

何度も本紙で言及していることだが、「**ハラスメント被害を訴えた女性A氏**」が昨年4月に「**なぜか、突如として**」議会事務局に配属されるまで、新井氏にはハラスメントの噂さえなかった。このことは、川合政権寄りの第三者委員会の報告書でさえ認めている事実だ。そして女性A氏は、新井氏を訴えると息巻きながら逆に訴えられても証拠も出せないまま弁護士だけは大增員し、しかもそれら弁護士は1人も法廷に来ない。挙句に今年の4月の異動で、女性A氏は「**任務完了**」とでもいうように、たった1年で議会事務局から他の部署に転属。テレビ埼玉の訂正放送も「**用が済んだら引っ込める方式**」で、まるで同じ「**プロデューサー**」が背後にいるようだ。

しかし、新井喜一氏は知っているのだ。暗がりに隠れてコソコソと蠢くゴキブリが一閃の光に照らされて逃げ惑うように、「**光**」は必ず「**闇**」を消し去ることを知っている。新井氏は常に明鏡止水の如く闇に動じない。

本紙を含めた支援者たちの方が熱くなるくらいの、新井氏への不法かつ不当の行いに対する「**怒り**」というものが新井氏自身にはないのである。新井氏は「**疑惑の被害女性A氏**」についてさえ「**気の毒だ**」とさえ評していた。なぜなら本件「**ハラスメント疑惑**」は、女性A氏が単独計画して出来るものではないことを、長い議員生活を送った新井氏はわかっているからだ。女性A氏に対する名誉毀損裁判でも、真の目的は「**真相解明**」であって、女性A氏個人を標的にしているわけではない。

新井氏はそのような考え方をする人物だからこそ**8期**にわたって市議を務め、議会事務局職員にも人気があり**女性A氏の登場までは、ハラスメントなど噂の欠片もなかった**のである。途方もなく深く公正な人間だ。それが「**でっち上げ**」と「**スキャンダル商法**」のマスコミの虚偽報道・偏向報道によって、家族の安寧もろとも闇の勢力に奪われたのだ。

新井氏が沈黙を破る決意をしたのは、家族を守り、このような不法行為がまかり通る異常な市政を糾し、真の市民社会の実現に与するためである。市議選で敗れても「**川越市民・新井喜一**」が消えたわけではない。このことを「**反新井氏派閥**」は理解できていないだろう。まさに肉を切らせて骨を断つが如く、「**ハラスメント疑惑**」真相解明のための「**名誉毀損裁判**」も併せて、市民・新井喜一氏の進撃はこれから始まり、1,216人の皆様の期待に応えることになるだろう。